山と博物館

第５３巻　第８号　２００８年８月２５日　　市立大町山岳博物館

鹿島槍荒沢奥壁　（撮影　柳沢昭夫　2008. 4. 23）

大町山岳文化研究会の発足にあたって

清水　隆寿

雄大な北アルプス。安曇野の大地を従えて聳えるその姿は秀麗にして、その崇高さは古来より今に至るまで、そこに暮らす里人にとっていささかも薄らぐことなく保ち続けています。大町山岳博物館はこうした山なみの袂に建立され、北アルプスとそこに暮らした人々の歴史を語る証言者として、あるいは語り部として、山岳文化の発信拠点たるべく、昭和26年の開館以来取り組んでまいりました。

本年度よりは、将来における博物館登山史部門の展示改修を視野に入れ、後立山における大正から昭和30年代までの近代登山史に重点を置き、この時期に展開された鹿島槍北壁、荒沢奥壁での大学山岳部や社会人山岳会が行ってきた積雪期登攀の歴史を明確にし、記録として残していくために「登山史に関する研究会」を発足し、調査を始めています。調査の主たる内容は、各大学などに残された部報や会報などの文献資料調査に加え、登攀が展開された現地に赴き、登攀路の軌跡を明確にするためのトレースを伴う現地調査を行っております。（表紙写真）

また一方で、これに併せ友の会はもとより、広範な市内外の山岳文化に関心を寄せる方々を募って、「山岳」をキーワードに登山の歴史、自然や現在山岳が抱える課題などを取り上げ、（仮称）大町山岳文化研究会を発足し、学習会を重ねていこうと考えております。今回の会の発足は、平成14年、大町市が将来のまちづくりのあり方を示した「山岳文化都市宣言」の趣旨を共有し、そこに住まう人々によってさらに成長させ、自ら様々な課題を学び、考え、育むことができるような実践の場と位置付けております。岳とともに共生し、岳に癒され、岳に抱かれて里に暮らす多くの方々の情報交換の場として、埋もれた歴史を探求し、「山岳」がもつ新たな魅力を創造していけるような会を目指しております。山岳文化というものに関心をお寄せ頂き、多くの方に参加していただきたいと考えております。申し込みは、山岳博物館までお気軽にご連絡ください。

（大町山岳博物館　学芸員）

黒部に逝った信州の名猟師小林喜作（後編）

厳冬の後立山西面に印された最後の足跡

伊藤　達夫

冬の後立山と黒部

装備が格段に進歩した現在でも、冬の後立山に登ることは容易ではない。多くの登山者は、比較的気象条件が穏やかな信州側の尾根を登り、晴天を捉えて山頂を往復するか大急ぎで次のピークまで縦走してやはり信州側の尾根を下るだけだ。ひとたび悪天候になれば、日本海から直接吹き付ける風は強烈であり、主稜線上に登山者が留まることを許さないからである。後立山の主稜線を何日もかけて縦走できるのは冬山登山の熟達者だけである。さらにこの後立山を越えてその西面、すなわち黒部川の流域に入り込むことは、下界からの隔絶を意味し、黒部川を横断し剱岳を目指そうとするような物好きなパーティーが試みるだけであり、その数は一冬にせいぜい二～三にすぎない。

ところが既に明治から大正の時代に、信州の猟師たちは厳冬の後立山を越えその西面を自由に歩き回っていた。登山者による五龍岳の厳冬期初登頂は昭和四年（一九二九年）、鹿島槍ヶ岳はその翌年だから、彼ら猟師の冬山での行動能力が如何に優れていたかが分かる。

カモシカ

カモシカ猟

猟師たちが厳冬の後立山を越える目的はカモシカにあった。その肉が美味で食用になるだけでなく、冬に獲った毛皮は高価で取り引きされ、角にも商品価値があった。また、雪の上では彼らを見付けることも犬をけしかけて追い詰めることも容易であった。

貧しい山村の民にとってカモシカ猟は一攫千金のチャンスであり、冬になると腕に覚えのある男たちは競って山に入った。その代表が小林喜作であった。

喜作最後の猟

大正十二年（一九二三年）二月十一日、喜作は、長男の一男と猟仲間の大井庄吉、荒井矢蔵を伴って、後立山西面に向けて爺ヶ岳の麓にある源汲を出発した。彼らの行程と遭難後の救出・遺体搬出の経過は、『喜作新道』の中に詳しい。それによれば、喜作たちは、次ページの概念図に示したようなルートを辿っている。

荷物を分けて運びながら大川沢に沿って進み、二月十四日に五龍岳を越え東谷山付近から東谷に下る途中で雪洞泊。翌日から二八日までに東谷の猟小屋を根拠に一帯で二十頭以上のカモシカを仕留めた。その間、周囲が切り立ち井戸の底のようになっている八峰キレットの下にまで出かけている。

三月一日からは棒小屋沢に移動を開始した。まずこの日は牛首尾根上まで

爺ヶ岳北峰付近から見た２月の棒小屋沢

荷上げし、標高差約九百mを、降り積もった新雪にもかかわらず、登り約五時間、下り一時間強で往復している。そして翌二日、牛首尾根を越え棒小屋沢の二俣の少し上流側に降り立ち、本流を遡ってコヤウラ沢の出合の猟小屋に達した。ここで、源汲から来た別の猟師三人と合流した。この日は途中に残した荷物を夜になってから喜作と庄吉が取りに行っている。彼らは夜間行動も厭わなかった。

苦労して移動した棒小屋沢であるが、天候が悪化し、そこでは成果のないまま下山することになり、三月五日に種池乗越まで荷物を運び往復した。そして下山を控えたその日の夜二十時頃、雪崩が小屋を押し潰し一行七人は全員生き埋めになった。

翌朝一番に脱出に成功した荒井矢蔵は、その場で輪かんじきを作り、救助を求めて下山。源汲の一つ南の集落である犬ノ窪の自宅に午後四時に帰り着いた。救助は迅速であった。その夜のうちに出発した矢蔵を含む救援隊の第一陣は、夜明けには現場に到着した。そして、源汲からの三名と庄吉を救出したが、喜作と一男は帰らぬ人となった。

喜作の足跡を追って

筆者が喜作たちの足跡を辿ってみようと思ったのは、ある意味偶然である。冬山登山技術が未熟なパートナーと厳冬の鹿島槍ヶ岳と五龍岳に登ることを考えたとき、彼らのルートが合理的であることに気が付いたからだ。

もちろんそこには、後立山主稜線上の難所、八峰キレットを通過するのに求められる登攀技術とは別の難しさがあることは分かってい

た。長年山に登っていると、自分がどれだけ山のことを知っているか試したくなるものだ。

入山は彼らと逆ルート、二〇〇六年二月下旬、大町アルペンラインを扇沢に向かって歩き始めた。稜線には扇沢を詰めて行きたかったが、アルペンラインの鉄橋を吹き飛ばした雪崩の話を読んだことがあるし、自分自身も扇沢から鉄橋の下をくぐって篭川の河原にまで達するほどの雪崩のデブリを見たことがあるので、最も安全な新越尾根を登って途中で一泊。さらに、いきなり沢に降りるのもためらわれ、棒小屋沢中尾根を下って、三日目にようやく棒小屋沢に降り立った。そこは喜作の遭難現場から一kmほど下流であったが、両岸からのデブリを見ているととても行ってみようという気にはならなかった。むしろ大急ぎで沢を下って牛首尾根の斜面に取り付いた。ここからは喜作たちが下ってきたルートと同じだと思う。最後は地形が複雑で、高度計を頼りにトラバースして、牛首尾根上の広い平坦地に出た。喜作たちはこのような場所でのルートファインディングをどうやっていたのだろうか。牛首尾根に上がった翌日、私たちは快晴の下、鹿島槍ヶ岳を往復した。南峰の肩から東谷に落ちる尾根の斜面にカモシカを発見し、こんなに標高の高いところにもいるのかと驚いた。

2月の東谷

雪が降って一日停滞した次の日、東谷に下った。ここも谷底をうろうろする気にはならず、すぐさま対岸の尾根に取り付いた。東谷尾根上では一箇所急なところでロープを使いその上で一泊。さらに翌日、五龍岳を越え遠見尾根を下って、天狗岳に向かって分岐した先で泊まり、最終日にはその尾根を真っ直ぐ南に下って大川沢に出た。

この山行では後立山西面をトラバースするために、いくつもの支尾根を登り降りした。尾根自体は樹林に覆われどれも易しかったが、沢へ降りる部分と沢から尾根へ取り付くところはどこも急で、アイゼンとピッケルを駆使しなければならなかった。昔の猟師はもっと不完全な足ごしらえで荷物も重かっただろうから、どうやって通過していたのかと思う。よほど地形を熟知し合理的なルート選択をしていたのではないだろうか。また、効率的に移動できる沢筋を積極的に使っていることから、雪崩に対する判断も的確であったことがうかがえる。もちろん喜作を含め多くの猟師が犠牲になっているので、その判断能力は完璧なものではなかったのであるが。

再び東谷へ

カモシカ猟師たちの行動力のすごさにすっかり魅せられた私たちは、翌二〇〇七年二月にも後立山西面を訪れた。白沢天狗尾根から爺ヶ岳を経て鹿島槍ヶ岳に達し、南峰の肩からの尾根を使って、入山四日目に東谷に下った。これは、大町周辺の最後の猟師であった鬼窪善一朗さんが冬の東谷に入るのに使うと語った尾根で、牛首尾根からの出だしはかなりの急斜面。樹林帯に入ると驚いたことに切り開きと赤ペンキの目印があった。降り立ったところは喜作たちの猟小屋があったあたりで、上流に行ってみると、後立山の主稜線が頭上に見え、デブリの山また山であった。

東谷尾根側の斜面は出だしを除けば傾斜も緩く広大で、カモシカ猟には適地だと思われた。私たちは、今度は五龍岳には登らず、東谷尾根を乗り越えて餓鬼谷の大黒銅山跡に下った。喜作遭難の前年の二月に唐松岳の八方尾根から入山した猟師がここを拠点に、東谷にも足を伸ばしてカモシカ猟をしたという記録がある。その翌年にもかかわらず、喜作たちが東谷で大量のカモシカを獲ったのは、カモシカがよほど多かったのか腕がよかったのか、おそらくその両方であろう。

私たちは、このあと祖母谷まで下り、長大な中背尾根を鑓ヶ岳まで登って、杓子尾根をその最末端の二股まで下って山行を終わった。

現代の冬山登山に欠けているもの

冬期の困難な岩壁登攀を成し遂げるために体力と技術を高めることで登山の力が付いたと短絡的に考える若者が多いがそれは違う。本当に困難な冬山登山は、長い年月をかけて山を熟知して初めて成功するものだ。その点で、小林喜作のような猟師たちが冬山で行っていたことを知ることは大きな意味があると思う。

（おわり）

（京都府立大学助教／京都てつじん山の会）

山と博物館　第53巻　第8号
二〇〇八年八月二十五日発行
発行　〒398-0002　長野県大町市大町八〇五六・一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一・二二一・〇二一一
FAX　〇二六一・二二一・二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachinagano.jp
URL:http://www.city.omachinagano.jp/sanpaku
印刷　有限会社　北辰印刷
定価　年額　一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇・七・一三二九三

R100　PRINTED WITH SOY INK　この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。